

平成 29 年 8 月 29 日
第 3 回八幡市総合計画審議会

部会長報告（第 1 部会）

八幡市総合計画審議会第 1 部会において、3 回にわたり議論した結果を以下の通り報告します。

基本目標ごとの主な議論・意見

基本目標 1 「ともに支え合う『共生のまち やわた』」について

[総括]

この基本目標においてめざすのは、いのちの大切さ、個人の尊厳を基本に、多様性を尊重する社会である。ともに支え合うとは、どちらかが一方的に支え、一方的に支えられるのではなく、若者も高齢者も障がい者も外国人も、昔から住んでいる人も最近引っ越してきた人も、八幡市が「自分たちのまちである」という意識を持ってそれぞれできる役割を果たしていくということ。多様な人々が緩やかに広くつながり、地域において様々な活動が展開されて、ともに支え合う『共生のまち やわた』が実現し、暮らしの安心につなげていくことが重要である。

(1) 共に生きる社会

- ダイバーシティ、多様性を尊重する社会というものを意識して考える必要がある。
- 外国人住民にとっても「自分たちのまちである」という意識を高めるアプローチが必要ではないか。外国人住民も地域で役割を果たしたり、活躍する場を作ったりして、その人が持つ力を引き出す工夫が重要になる。指標としては、子ども会・スポーツ・料理教室等を通じた外国人との交流会等の参加者数などを用いてはどうか。
- LGBTへの理解について、この施策のどこかに盛り込む必要があるのではないか。
- 障害のある人のQOLの視点を盛り込む必要がある。
- 自治組織やPTA等のコミュニティ組織で女性の活躍状況を評価できないか。また、評価指標として、審議会委員の女性の比率は思い切って 50%にしてはどうか。
- 結婚の促進として、若い人が一緒に何かする、対話を通じて心が動く場所・場面をつくってはどうか。
- 平和に関して、戦争体験談記録集の作成は、委員のお母様が協力され、委員もご存知でなかった話がたくさん出るなど、大変重要な取組であるという話が出た。この成果については、子どもたちが読んだ感想をフィードバックするようにするなど、もっと読んでもらえるような工夫が必要ではないか。

(2) 協働による地域づくり

- 自治連合会はかなり頑張っておられるが、自治会加入などにおいては、「役員のなり手」の問題と、加入しないことのデメリットが見えにくくなっているという問題がある。災

害時や防犯などで自治会等の地域のつながりは大切である。高齢の人や障がいのある人でも自治会の活動に参画できるように、負担を軽くするという方向性や、自治会活動へのメリットやインセンティブについても考えたい。

- 地域特有の課題というものはあるので、たとえ自治会組織でなくとも、地域で共通のことに何か活動するというのは必要である。
- 「地域のつながりを深める」というよりも、「地域のつながりが広がり、暮らしの安心感が高まる」という表現を使いたい。その中で、「暮らしの安心」感をどうやって計るのかを考える必要がある。単に加入率・組織率といったものよりは、地域でのイベントの数などが指標になるのではないかと。
- 「新しい公共」の担い手づくりに向けては、元気な高齢者や若い人など、積極的に人材を発掘し、活躍の場を提供していく必要がある。
- 生涯学習の充実が担い手づくりに繋がるよう、講座の修了者が新しい公共の担い手になっていく仕組みなどを考えられないか。
- 何か教わるためだけに集まったり、イベントに参加するだけでなく、自然と人が集まるような環境づくりがあればいいのではないかと。(etc.市役所周辺に花を植える。等)
- ボランティアの活動促進に向け、活動を「見える化」するなど、市民が評価することも必要。活動の対価として地元商店で使用可能な「地域ポイント制度」を採用しては。

基本目標2 「子どもが輝く『未来のまち やわた』」について

【総括】

この基本目標においてめざすのは、学力に加え、人としての賢さを備えた子どもを育てていくことである。そうした子どもの成長を支えるために、子どものいる親・家庭を孤立させず、地域や行政がしっかりと支えていく必要がある。特に、地域については、昔は近所の人々に見守られて育てていくという環境が自然にできていたが、現代においてはそうした環境を意図的に作っていく必要がある。そうした取組を通じて、子どもが輝く『未来のまち やわた』を実現し、地域の未来を担う人材を育てていくとともに、八幡市の質の高い子育て・教育環境が市内外に知られ、八幡市の一層のイメージ向上につなげていくことが重要である。

(1) 子育て支援

- 八幡市は子育てに力を入れている。ひとり親家庭にとっても育てやすい。しかし、子育て施策が良いということのアピールが不足していたり、子育て中の方に子育てサークル活動などがあまり知られていなかったりするなど、内外に対する情報発信に工夫の余地があるのではないかと。また、市民からも情報を投げかけるキャッチボールがあればいい。
- 子どもの貧困の背景には親の貧困があり、連鎖を断つためにどうサポートしていくかが重要。貧困を含め、課題を抱えている家庭は孤立しがちであり、どういったネットワークを充実させていくべきかの検討が必要である。
- 待機児童ゼロという現状は素晴らしい。ぜひとも維持していただきたい。保育園と幼稚園のバランスもよく、教育内容も充実している。このような就学前教育・保育環境の質の高さをもっとPRしていくことが必要である。

(2) 子どもの生きる力の育成

- 就学前教育・保育環境が良い一方で、小中学校の学力に課題があるから引越すという話も聞いたことがあり、学力向上に向けた取組が必要である。そのためには、学力下位層をどう引き上げるかが課題であり、それには学校で学習したことの復習の習慣をつけることや、教員のケア、教員の質の向上といったことが必要ではないか。
- 教育は学力だけでなく、いろいろな人と直接出会うことが重要で、高齢者と子ども、障がいを持った人と子どもなど、様々なコラボレーションがひとつづくりに重要。また人間として「賢い子ども」を育てていきたい。重要なポイントは対話力。
- 就学前教育を含め、もっと質の高い教育を目指せると思う。小さい時から家庭やその他で言葉を交わし、対話力を上げていくことが重要。先生が子どもと対話する能力を上げるための先生への研修を行ってほしい。
- めざす姿としての「生きる力」とあるが、八幡市オリジナルな子育てのメッセージがあってもいい。人間関係力やクリエイティブな力、相手の痛みが分かるイマジネーションが大事となる。一方で「生きる力」はとても力強い表現でもあるとの意見もあった。
- また、お茶の話や体験、石清水八幡宮、飛行神社、松花堂庭園等への訪問等、八幡ならではの教育の充実を図るべきではないか。
- 教師だけが頑張るのではなく、地域の支えも大事であり、学校が地域に根付く手法として、学校地域支援本部はますます発展してほしい。

基本目標6 「安心・安全な『持続可能なまち やわた』」について

[総括]

この基本目標においてめざすのは、環境と発展が調和し、豊かな生活の質が次の世代に引き継がれ、さらに高めることができるようにするものである。昨年1月には、国連サミットで採択された「持続可能な開発目標 (SDGs)」が発効し、昨年末には国が日本としての実施指針を示している。八幡市においても、自然環境やソフト・ハードのインフラ、行政の体制整備を進め、安心・安全な『持続可能なまち やわた』を実現していく必要がある。

(1) 環境と発展の調和

- 「ポイ捨てをしない」など「しない」方向の取組が多く挙げられているが、「する」方向の取組がもう少しあったほうが良いのではないか。たとえば花をたくさん植えたり植樹をしたりするなど、美しい八幡市づくりに向けた取組がないか。駅前、市役所などの「顔」になる場所にもっと花があればと思う。
- 「持続可能」というが、ずっと続くのは当たり前という感覚があり、もっと豊かな、よりよいという意味を持たせたい。
- 竹は八幡の象徴である。環境・美化の点でもっと生かしたい。
- 物を大切にすることを小さな子どものうちから育てていくべきではないか。

(2) 安全・安心

- 刑法犯認知件数など、治安の指標が改善されているのに市民の不安が解消されていないこと、治安が悪いというイメージを持たれていることについて、考察を深めていく必要がある。個人情報等プライバシーの問題もあり地域の方の同意が必要だと思うが、防犯カメラの設置は犯罪の抑止・防止につながるため、設置への何らかの支援が必要。
- 子どもを犯罪から絶対に守るという決意が示されると良い。見守りが課題とされているが、登下校の時間帯は人の目をたくさん作る、ということが大切。見守りをされている方が固定化し、負担が大きいという話もあるので、自治会同士が団結してもっとうまく機能すれば良い。
- 普段の見守り活動が、災害時に活きる。高齢の一人暮らしの方が増えているため、見守りが必要な人は潜在的にもっとたくさんいると思う。そういった観点で自助・互助・共助・公助による防災・減災対策を進めていく必要があるのではないか。

(3) 持続可能な生活都市の基盤づくり

- 「生活都市としての魅力の向上」という施策があるが、生活都市は、ただ住むだけでなく、暮らしを楽しむような都市像につながれるとよい。豊かな環境の中で、団地から戸建て住宅まで多様な住居形態がある。団地内での住み替えされる方も含め、八幡市の中で移り住み、その動きが循環するような仕組みができればよいのではないかと。そうすれば、若い世代がどんどん入ってくるのではないかと。また、楽しみながら、自分が関わる範囲で少しお金を稼げるようなコミュニティビジネスができる環境があってもよい。
- 公共施設では、これまでどんどん拡散が続いてきて、それぞれの施設がそれぞれの機能別に分かれて存在してきた。今後は、「図書館は本を貸すだけ」ではなく、ひとつの場所が多様な機能を担い、多くの世代が交流したり、地域関係なく集まれるような雰囲気をつくることも大事ではないかと。
- 八幡市が管理する公園は、ペット禁止となっている。犬の散歩を通じてコミュニケーションが生まれることもあり、ルール作りを考える必要があるのではないかと。

(4) 戦略的な行政経営

- 行政サービスを市民が求めるという関係でなく、市民が自ら当事者意識を持ってまちを盛り上げるための仕掛けをし、それに行政が応える関係に変わっていく必要がある。
- 一方で、必要な人に対しては行政側から出向いていく、アウトリーチ的な機能（発見・訪問・御用聞き）の充実も必要なのではないかと。
- 市からの情報発信にはもっと工夫が必要である。

以上

部会長報告（第2部会）

八幡市総合計画審議会第2部会において、3回にわたり議論した結果を以下の通り報告します。

基本目標ごとの主な議論・意見

基本目標3 誰もが「健康」で「幸せ」な「健幸のまち やわた」

[総括]

この基本目標においてめざすのは、健康の維持・管理に向けて、健康づくりの拠点整備、個人の活動を促し、継続させるための仕掛けづくりや人材育成、ネットワークの形成など、ハード・ソフト両面での取組が進むことによって、誰もが「健康」で「幸せ」な「健幸のまち やわた」を実現させることである。健康で長生きすることは、本人の幸せにつながることはもちろん、介護・看護に係る家族の負担を減らし、市の財政負担を軽くすることにもつながることである。

(1) 健康で幸せのまちづくり

- 健康づくり習慣の定着促進に関して、市が取り組んでいる健康マイレージ事業は利用者が少なく周知も弱いと感じる。マイレージ取得までのハードルを下げ、働き盛り世代も参加しやすいようにしてはどうか。また、健康づくりは、市の財政面の向上につながるといった観点で、重要性を強調してはどうか。
- 健康無関心層の人に、直接声をかけて「検診にいきましょう」「歩きましょう」「イベントに参加しましょう」と勧める健康アンバサダーを確保・育成する必要があるのではないかな。
- 地産地消をはじめ、旬のものを食べることや、良い食、健康的な食というものを広めていくことで、心身ともに健康であることが幸せにつながるように、「健幸」の取組を広げてほしい。また、それが農業体験、収穫体験等による農業の楽しさや達成感につながることで、地域農業の活性化につながっていく。
- 基本目標は横断的に立てようとしているが、地産地消については農業部門であり別の担当、スポーツは別の担当という具合に、行政の議論が縦割りになりがちである。その点をよく考えてほしい。
- ラジオ体操は日常的に近所のできる運動であるとともに、地域のつながりにもなる。しかし、市街地の公園でラジオ体操をすると騒音の苦情が出たりする。健康づくりのためのコミュニティの形成やそういった活動自体に対する支援などの取組が必要。
- 健康づくりの基盤に関して、ウォーキングコースの整備需要は高く、見える施策として検討価値があるのではないかな。一方で、閑散としている公園が多い。今の公園は禁止事項（ペット散歩、ボール遊び等）が多すぎる。幅広い世代が楽しめるよう外遊び・運動

のできる公園の利用条件を整理し、身近なところで運動ができる環境を市民と市が協働でつくっていきけるようにすべきではないか。また、ウォーキングと食をつなぐネットワークの結節点として公園を活用することもできるのではないか。スポーツの拠点を市の西側の居住地域に作っていくという視点も必要。

(2) 医療・介護の基盤づくり

- 救急医療機関が近くに少なく不安、という声をよく聞く。他市との連携なども含めて、より身近な病院で受診できるようになるようにならないか。
- 介護施設は他市等との比較材料がなく、機能や利便性がよくわからないので、適切な情報提供が必要ではないか。

基本目標 4 自然と歴史と文化が織りなす「観幸のまち やわた」

[総括]

この基本目標においてめざすのは、市民が、日常的な生活の中で、文化や歴史等を通じてシビックプライドを醸成することや、外から八幡市を訪れる方が、八幡の文化・歴史・産品等に触れ、体験することにより、自然と歴史と文化が織りなす「観幸のまち やわた」を実現することである。そのために、人材の育成、ハードの整備、情報発信等をバランスよく戦略的に進めることが重要である。

(1) シビックプライドの醸成

- 文化の保存・継承に向けて、史跡、名勝に指定されていない隠れた史跡等の保存・再生も今のうちに着手する必要があるのではないか。
- 「お茶の京都」に向けて、周辺地域との連携活動を積極的に行う必要があるのではないか。
- シビックプライドの醸成に向けて、エジソン、二宮忠八、松花堂昭乗など八幡市ゆかりの偉人については総合計画のなかで記載すべきではないか。また、子どもへの働きかけが重要で、地域の高齢者から歴史を聞く機会や取組があれば、自分の地域への理解が進み、愛着が醸成されるのではないか。
- 歴史・文化・伝統を考えると、人の意識の中にどういうものがあるのか、それを新しく入ってきた人、若い人にどうやって受け継いでいくのが重要。
- 市民の国際交流について確認し、必要であればサポートすることなどを目標に加えることも検討してはどうか。

(2) 幸せと出逢う観光まちづくり

- 観光客数や消費額等の実態を調査し、「観幸で稼ぐ」計画を立案するべきではないか。観光の振興といっても背割堤に行くだけでお金を落とすところも、滞在するところもない。桜の季節だけでなく、年間通じて広く観光客を呼び込めるよう駐車場整備を含めたハード整備と市内を歩けるルートづくりが必要ではないか。

- 八幡市駅近くの男山、三川合流域、旧街道等を活かし「歩く観光」をテーマにする、サイクリングロード、さくらであい館を活かし、「サイクリングの街」をテーマにするなど、テーマにできる観光資源を積極的に活用すべきではないか。
- まちのイメージを良くし、まちを発見し、シビックプライドを醸成するためにも、玄関口の八幡市駅前の整備は最も重要。しかしこれにはムーブメントが必要であり、市民をどう巻き込んでいくかがポイント。なお、イメージは共有しなければ進まないが、駅周辺を含め提供できるコンテンツのあり方、駅周辺と連動した空間づくりを検討する必要がある。また一方では、物理的な制約や、投資効果と事業採算性を踏まえる必要がある。さらに、駅北側の整備により三川合流部につながるルートも検討してほしい。
- 「観光のまち やわた」に市民をどう巻き込むかも大事。市民参画の一角として、ボランティアガイドの育成・登用などで観光協会と連携し、地域ごとの偏りなく市内全域から参画してもらえるようにしてほしい。
- お茶の京都やものがたり観光を進めるにあたり、日本茶インストラクターをうまく活用し、お茶文化の発信・普及を図ってはどうか。
- 民間事業者と連携したプロモーション活動を検討すべきではないか。その際に、SNSの活用も有効ではないか。

基本目標5 しなやかに発展する「活力のまち やわた」

[総括]

この基本目標においてめざすのは、八幡市の発展の基盤となる人材、事業者を育成し、それを支える都市インフラを整備することである。そのために、「コンパクト」「ネットワーク」をキーワードに、高速道路や新幹線等の広域交通網の整備を見据え、計画的・戦略的な開発を進めていくことが重要である。

節ごとの具体的な意見については以下の通り。

(1) 活力の担い手育成

- 商工会の会員が減っているが、その原因のほとんどは廃業で、特に商業については後継者に継がせられるだけの利益が上がっていない状況であり、対応が求められている。
- 四季彩館の直売所は、土日は流れ橋等の観光客でにぎわっているが、周辺住民は農家の方が多く、普段は需要がない状況。男山団地でマルシェを行う、春にはさくらであい館に本格的に出店するなど、様々な工夫を行う余地があるのではないか。特に、観光と地元農産品の販売促進については、連携が図られるよう、計画における表現を工夫していただきたい。
- 全体として農業者は減少傾向にあるが、農業の新たな担い手の育成につながっている動きもある。良い動き、伸びていくような動きは守っていき、総合計画の中で表現し、方向性を示してほしい。
- 新たな企業誘致だけでなく、八幡市で仕事をしている既存の事業者・企業に対しても、支援や活性化に向けたメッセージ性が必要ではないか。

(2) 活力の基盤整備

- 企業誘致は他地域との競争であり、八幡市の強みはどのあたりにあるか、優遇措置も含めてしっかりと検討していく必要があるのではないか。優遇措置も競争であるので、しっかりとしたアピールが必要。
- 第二京阪道路の側道沿いは開発のポテンシャルが高い。農業の振興も考えなければならないが、農地転用が促進されるのであれば、休耕地を利用して、優良農地と交換して整理することも可能性としてあるのではないか。
- 企業誘致の質が重要である。物流系だけでは、機械化が進んでいて雇用が増えないし、トラックが増えるものも問題である。何件立地したということよりも、生産額や雇用がどのくらい増えたのか、また、どのような企業に進出してもらいたくて、実際進出してもらえたのか、といった観点で評価していくべきではないか。また、進出した企業同士がネットワークを築いていくようなマネジメントも重要である。そのためにも、アクセスや企業同士が連携できるマネジメント等、どういった優遇措置にニーズがあるのか企業やディベロッパーから要望を聞いてほしい。
- 八幡市駅前の周辺整備は、しっかりと青写真を描き、八幡市の表玄関、いちばんの「顔」になるよう整備をしていく必要があるのではないか。
- 立地適正化計画は、都市機能誘導地域と居住誘導地域の集約というのがキーワードであり、そういった方向性を打ち出せば、何らかの措置を引き出せるのかもしれない。

以上